聖書講解ワークショップ

ワークシート準備ガイド

今回のワークショップでは、スモールグループの準備として、参加いただく皆様それぞれに、ワークシートを準備していただきます。特に、初めて「聖書講解ワークショップ」に参加される方にとっては、この準備が難しく感じられるかもしれません。私たち主催者としては、参加者の皆様にしっかりと取り組み、ベストを尽くしていただきたいと願っています。一方で、スモールグループでの発表に対して、過度な不安を抱いてほしくはありません。「説教準備ワークシート」の内容を理解する最も効果的な方法は、実際にワークショップに参加することです。もし今回が初めての参加であれば、事前にすべてを完璧に理解している必要はありませんので安心してご参加ください。このガイドでは、ワークシートに記載されている用語や設問の意図を解説しています。また、ウェブサイトには過去のワークショップの音声も掲載されていますので、それを参考に準備を進めていただくことも可能です。

ワークシートを進める中で覚えておいていただきたいのは、各設問は前の設問に基づいて積み重なっていくように構成されている ということです。設問は「説教準備の道筋（Pathway for Preparation）」に沿った流れになっています。最初のステップは 釈義（Exegesis）で、本文の構造や強調点、文脈を明らかにしていきます。そのうえで、著者の主な意図（main point） を見出します。（言い換えれば、「この文脈において著者が最も強調したい点」です。）次のステップは 神学的省察（Theological Reflection） です。ここでは、著者の主な意図が福音とどのように結びついているかを考えます。さらに、福音を踏まえつつ、著者の意図を理解し、説教者が語るべき主な論点を定めます。そして、そのポイントをどのように論証するかを考え、説教のアウトラインを作成します。最後に、そのポイントと論証から導かれる、さまざまな立場の聞き手に対する適用を検討します。

# 1．著者はこの聖書箇所をどのような構造で書かいていますか？

**a）聖書箇所の構造を示し、それぞれのセクションに該当する節を記載してください。**

**b）どのような手法・アプローチでその構造を見出したのか説明してください。**

**c）その構造によって明らかになる強調点は何でしょうか。**

「著者の構成（author’s organization / structure）」とは、聖書の節の構造や骨組みを指す表現です。各聖書箇所の文章の背後には、著者が用いた素材の配置や論理展開があり、それによってその箇所が構成されています。いわば、著者自身が考えたアウトラインのようなものです。その構成の中では、一つ一つの箇所が果たしている役割があります。私たちが「この箇所の構造を特定してください」とお願いするときは、このような「形」や「流れ」を見つけてくださいという意味です。構造は、文法的・論理的な展開である場合もあれば（談話文に多い）、物語の筋や登場人物の比較、文学的な表現技法である場合もあります（物語文に多い）。また詩文であれば、節やスタンザ（連・段落）の区切りなどが構造の手がかりになります。しかし、いずれの場合も、その箇所をいくつかのセクションに区切り、対応する節番号を明記してください。なお、ここでいう「構造（structure）」とは、特定の聖書箇所の構成を指しています。聖書全体や書巻全体の構成を指す場合には、「マクロ構造（macro-structure）」という用語を用いるのが適切です。

大切なのは、構造を調べることで、著者が何に重点を置き、何を伝えようとしているかという「強調点」が明らかになるということです。だからこそ、聖書箇所を個別に見るだけでなく、全体の流れを理解することが重要になります。構造全体をよく考え、それぞれの部分がどのように関係しているかを見てみましょう。「なぜこの順番なのか。」「どうしてこのように展開しているのか。」こういった問いかけをすることで、著者の強調点が見えてくるはずです。

最後に、その構造をどのように見出したのか、または構造を明らかにするためにどんなアプローチや方法を用いたのかを説明してください。私たちが知りたいのは、聖書箇所の強調点を見つけ出すにあたり、どのように考え、どのように取り組み、見出したのかという思考の過程です。

ジャンルとテキストタイプ（文体・形式）とは？:

「ジャンル（genres）」とは、文学の中で特徴的な性質を持つカテゴリーを指し、それぞれに応じた読み方が求められます。たとえば、人は、新聞、小説、レシピ、手紙、歌詞などをすべて同じようには読みません。同様に、聖書にもさまざまなジャンルが存在します。旧約の歴史書、預言書、知恵文学、黙示文学、福音書と使徒の働き、書簡などが挙げられます。各ワークショップでは、一つのジャンルを取り上げ、そのジャンルを代表する一書に焦点を当てて学びます。ただし、ワークシートの設問は聖書講解の原則に基づいているため、どのジャンルにも応用可能です。

「テキストタイプ」（text types | 文体や形式）は、ジャンルとはやや異なる概念です。どちらも文学の分類に関わるため混同しやすいのですが、ジャンルはより大きな枠組みであり、内容・歴史的背景・文学形式・修辞的目的などを考慮して分類されます。一方で、テキストタイプは、特定の聖書箇所における文章の形式そのものを指します。したがって、構造分析を行う際に非常に重要なのです。聖書には、主に3つのテキストタイプがあります：

* **物語（narrative / stories）：**出来事や登場人物を中心としたストーリー形式
* **談話（discourse / speeches）：**論理的な説明や教え、スピーチ形式
* **詩（poetry）：**詩的表現や並行法を用いた形式

重要なのは、これら3つのテキストタイプはそれぞれのジャンルの中にすべて現れる、という点です。つまり、歴史書や預言書、書簡の中にも、それぞれ「物語」「談話」「詩」の要素が含まれているのです。それぞれのテキストタイプごとに独自の構造があり、その構造を見出すために特有の分析手法が必要となります。もちろん、まずは該当箇所を（逐語訳で）繰り返し丁寧に読むことです。そして、そこがどのテキストタイプに該当するかを見極めてください。テキストタイプが分かったら、それに応じた以下の分析方法を用いてみましょう。

* **談話（discourse / speeches）：**このタイプの文書は、旧約聖書の歴史書に登場する演説や、新約聖書の書簡（おそらく元々は説教として語られた内容）に最も多く見られます。特徴として、通常は一人の話し手がいて、論理的な流れで展開されることが挙げられます。このタイプの箇所で構造を見出すには、論理や推論の展開をたどることが鍵となります。具体的には、次のような方法が役立ちます。
  + **文法的分析**：動詞を特定する、どの節や考えか他の主要な考え・概念に従属しているかを見極める
  + 論理構造分析：「アーキング」に似た手法
  + **談話分析（discourse analysis | ディスコース分析）**

また、**キーワード**や接続詞（例：「しかし」「だから」「さらに」など）は、文法的・統語的な構造を把握するうえで非常に重要です。さらに、すべてのテキストタイプに共通して、**語句やテーマの繰り返し表現**には特に注意を払う必要があります。これらは著者が強調しているポイントを見出す手がかりとなります。

* **物語（narrative / stories）：**このテキストタイプは、旧約聖書の歴史書、一部の預言書、そして福音書や使徒の働きなどに最もよく見られます。物語における構成は、主に以下の要素を中心に展開されます：
  + プロット（物語の流れ／ストーリーアーク（story arc））
  + 登場人物（類似や対比を通して描かれる）
  + その他の文学的手法（例：時間帯の変化、場所の移動）

その中でも最も一般的な文学的特徴はプロット（plot）であり、以下のような独特の形を持ちます：

1. **設定（setting）**：登場人物、時間、場所などの紹介を含む
2. **対立（conflict）**：問題や事件が発生し、何らかの修正や解決が求められる局面（盛り上がりの始まり）
3. **クライマックス（climax / rising action）**：物語の転換点。解決に向けて流れが決定的になり、それが避けられないものとなる瞬間
4. **解決（resolution）**：実際に問題・対立がどのように解決されていくかが描かれる
5. **新たな設定（new setting / stasis）**：物語の展開を経た後の新しい状況や安定した状態。次の展開へとつながる土台にもなる

物語の構造を把握する際には、このようなプロットの流れを意識して読解することが重要です。

* **詩（poetry）：**このテキストタイプは聖書全体に見られますが、特に**知恵文学**、**預言書**、**黙示文学**に多く含まれています。詩の構造を把握するための鍵は、「**スタンザ（連、段落）**」がどのように機能しているかを見極めることです。多くの英語訳聖書では、詩をスタンザごとに区切って表示しており、行の間にスペース（改行）を設けることで視覚的に分かりやすくしています。ただし、編集者の判断が常に正しいとは限りません（また、編集者・訳によって区切り方が異なる場合もあります）。スタンザの区切りを見つける際には、次のような点に注目してください。
* **表現の繰り返し**（同じ言葉やフレーズの反復の有無）
* **イメージの変化（比喩や象徴の移り変わり）**
* **語り手の変化**（一人称、二人称、三人称など）
* **視点の変化**
* **並行法（パラレリズム）の変化**（二行や三行の関係がどう成り立っているか）
* **その他の文学的手法**（例：アルファベット順の構造など）

これらの手がかりを通して、詩の構造やスタンザのつながりを理解することができます。

前述の通り、まず行うべきことの一つは、**自分が扱う聖書箇所の「テキストタイプ」を特定すること**です。ただし、テキストタイプを見極める際によく直面する課題の一つが、「**会話文（dialogue）**」です。会話文は基本的にはナラティブ（物語）の形式、つまり語り手が登場人物同士のやりとりを描写する形式です。しかし、その会話は「物語」として機能しているのか、それとも「ディスコース（談話）」として機能しているのかを確認することが**重要です**。たとえば、会話の中で二人目の話者が登場しても、それが物語の展開のためではなく、**主たる話者の論理を補強したり導いたりする目的で存在している**場合があります。つまり、その会話がプロットを進めるのではなく、**論理的なやりとりを補完している**ようなときは、「**物語」ではなく「談話」として解釈することが可能です。**したがって、会話文であっても「談話」としてとして読むべきだと感じたなら、**ディスコース（談話）として扱っていただいて構いません。**

**2. 文脈・背景情報はこの聖書箇所の意味をどのように明らかにしていますか？ 次の点を考慮してください：**

**a）文学的文脈（前後の箇所との関係）**

**b）歴史的文脈（著者が語りかけている読者・当時の受け手が置かれていた状況）**

**c）文化的文脈（当時の生活習慣や価値観など – その時代・その場所における生活に関わる具体的背景）**

**d）聖書全体の文脈（著者が他の書から引用・暗示している箇所や、歴史的なつながり）**

**※ この聖書箇所に関係があるもののみ記述してください。**

どのジャンルであっても、「文学的文脈」（および書全体の文脈）を理解する最良の方法は、その**書全体を繰り返し読むこと**です。何度も読み返すことで、その書における主要なテーマや論点、主要なセクションにおける物語の流れや議論の展開を把握できるようになります。しかし何よりも大切なのは、とにかく読み続けることです。  
文章の位置付けにおいて特に重要なのは、**自分が扱う聖書箇所の前後にある箇所**です。それらはあなたが取り扱う箇所とどのように関連しているでしょうか。また、そこに共通して登場する**大きな議論やテーマ**はありますか？それがあなたの取り扱う箇所の理解に役立つかもしれません。

「歴史的文脈」に関しては、次の内容を確認することを推奨します。

* 旧約聖書の歴史書：  
  歴史的文脈を考える際には、まず（可能な限り）その書の**元々の著者と読者を特定すること**が大切です。旧約の歴史書では、この特定が難しいこともありますが、**執筆時期のおおよその見当をつける**ことはできます。たとえば、『ルツ記』の舞台は「士師が治めていたころ」と記されています。しかし、この書には出来事が最後まで語られているため、**出来事が起こった当時ではなく、その後に書かれた**ことが分かります。実際、物語の最後には**ダビデ王の名**が出てくるため、少なくとも**王政が確立された後**（つまりダビデの時代以降）に最終的な形で書かれたと考えられます。このように、**他の旧約聖書の書物（預言書や他の歴史書など）と照らし合わせ、同じ時代背景を扱っている箇所を探す**ことは、その書の歴史的文脈を理解する助けになります。
* 知恵文学：  
  知恵文学の書物は、多くの場合**歴史的文脈からやや独立している**傾向があります。たとえば、『雅歌』や『ヨブ記』には、**イスラエルの歴史の中での位置づけを示す手がかりはほとんどありません**。『箴言』には、いくつかの有益な手がかりがあるものの、**この書において歴史的文脈が重要な役割を果たしているかどうか**はあまり明確ではありません。そのため、歴史的文脈について、聖書から何が学べるか自問することは大切ですが、**解釈の根拠をそこに置く際には慎重に行うように**してください。
* 預言書：  
  旧約の歴史書と同様に、**預言書の最初の読者を特定するのは難しい場合があります**。ここで言う「読者」とは、**預言や神託を口頭で直接耳にした人々ではなく、最終的に書き終えた預言書を最初に受け取った人々**のことを指します。オリジナルの読者の状況を明確に特定することは必ずしも可能とは言えませんが、通常は**その書に記された出来事より後の時代に生きていた人々**と考えられます。たとえば『イザヤ書』では、**セナケリブによるヒゼキヤ王とエルサレムへの攻撃**が**歴史として記述**されています。つまり、**この出来事よりも後になってから書が完成した**と考えられます。したがって、『イザヤ書』が書物として完成して読者に届けられた最も早い時期は、その歴史的出来事の後であることを意味します。
* 黙示文学：  
  黙示文学は、旧約聖書と新約聖書の両方に見られるジャンルです。旧約聖書の場合、最初の読者（最初に書かれた文書を受け取った人々）を正確に特定するのは難しいことが多いです。しかし、他のジャンルと同様に、記されている出来事より後の時代に生きていた人々がその文書を受け取ったと考えるのが一般的です。一方、新約聖書の『黙示録』は、歴史的背景が比較的明確です。歴史的文脈とは、ヨハネが手紙を書いている諸教会の状況を指します（これについては『黙示録』1〜3章に記されています）。そのため、ヨハネが書いた言葉が、それぞれの教会にどのように受け取られたかを考慮することが重要です。
* 書簡：書簡の歴史的文脈を知るための最も有力な情報源は、通常その書簡自身の中にあります。特に、手紙の冒頭や結びには、その書が書かれた歴史的状況に関する手がかりが含まれていることがあります。また、文中に出てくる人物名や地名にも注意を払いましょう。特にパウロ書簡では、反対者や偽教師に関する具体的な言及が重要な手がかりになります。次のような問いを自分に投げかけてみてください。「この手紙の受取人がいた都市や地域では、どのようなことが起きていたのか。」さらに、関連する他の書簡や聖書箇所を参照することも有益です。たとえば、『第二コリント』を取り扱う時は、『第一コリント』が手がかりになるかもしれません。また、『第二テモテ』を読むときには、『第一テモテ』や『エペソ人への手紙』が参考になる場合があります。また、**『**使徒の働き**』**は非常に役立つ資料です。書簡中の地名や人名が『使徒の働き』に出てこないかを調べてみてください。こうした歴史的情報自体が、その箇所が最も伝えたいポイントになることはほとんどないかもしれませんが、「文脈」をより深く理解するための土台として非常に重要です。
* 福音書・使徒の働き：  
  福音書の歴史的文脈を把握するのは、やや複雑です。その理由は、**著者に関する情報が限られている**からです。（※福音書は、基本**無記名文書**です。ただし、古くから伝えられてきた言い伝えがあり、その伝承は正しい可能性が高いとされています。）また、**どこで書かれたのか、誰に向けて書かれたのかについても正確にはわかっておらず、多くは推測の域を出ません**。実際、福音書は**古代地中海世界全体への広範な配布を意図して書かれた可能性が高いため、特定の場所や特定の教会の状況に限定されるべきではない**と考えられます。ただし、ここで言っているのは**あくまで「福音書の歴史的文脈」について**です。  
  一方で「歴史的なイエス」を扱う聖書学の分野や、**古代地中海世界の「文化的背景」**といった観点は、依然として非常に重要であり、**福音書自体からそれらを読み解くことは極めて有益です**。

「文化的文脈」とは、その書物に登場する人々や登場人物たちの日常生活の背景を指します。重要なのは、それが当時の読者にどのように理解されたかを考えることです。これは歴史的文脈とは異なり、特定の時代・場所・受け手に関するものではなく、登場人物と読者が共有していた生活上の具体的な情報に焦点を当てます。たとえば、福音書に出てくる農業に関するたとえ話を理解するためには、当時の人々が共通に持っていた農業や経済の常識を知っておく必要があります。登場人物も読者もその常識を共有していたためです。例えば、『ルツ記』の文化的文脈を理解するには、「さばきつかさが治めていた時代」との記述に基づき、『士師記』を読むことで当時の生活の様子を把握できます。預言書の場合は、どの王の治世かを確認することで、当時のイスラエルやユダの社会的・霊的課題を知る手がかりになり、預言者のメッセージの意図を理解する助けとなるでしょう。なぜなら、多くの預言の第一の成就は、イスラエルやユダの歴史の中で起こっているからです。最後に重要な点として、聖書から導き出せる情報は信頼できますが、聖書以外の情報に基づく考察は慎重に扱う必要があります。

「聖書的文脈」を考える際には、その箇所を非常に注意深く読む必要があります。「著者は、聖書の過去の歴史的出来事に言及しているのか」「すでに書かれている聖書の箇所を引用したり、暗示しているのか」このような問いかけは「釈義（exegesis）」の一部であり、「著者が当時の読者に対して、どのような聖書的つながり（取り扱っている箇所に関連する、他の聖書箇所）を想定して語っていたか」を探る助けとなります。ここで注意すべきことは、「神学的なつながり」を探すことではないと言うことです（たとえば、「著者が「恵み」という言葉を使っているから、他の「恵み」に関連する箇所を調べよう」といった探し方。）このような作業は第4問の「神学的考察（theological reflection）」で扱います。この段階では、著者がどのように他の聖書箇所に言及しているかを探してください。それは、直接的引用でも、より広い意味で暗示しているものでも構いません。該当する箇所がある場合、必ずその元となる箇所を読んでください。そして最も重要な問いは、「なぜか？」です。なぜ著者はこの聖書的なつながりを持ち出したのでしょうか。その出来事や物語、またはその文脈のどの部分が著者の関心を引いたのか**。**著者はどのような意図でそのつながりを示しているのか。このような問いを通じて、著者の意図をより深く理解していきましょう。

**３. 著者が聞き手に向けて論じている主な論点は何ですか（一文で簡潔に答えてください）**

ここでいう、著者の「主な論点」とは、その聖書箇所全体の目的や中心的主張を指します。それは叙述的（descriptive）であったり、規範的（prescriptive）であったりすることもあります。単なる要約ではなく、著者が聴衆に訴えかけ、納得させようとしている中心的な論点です。

この著者の論点を表現するにあたり、以下の点に留意してください：

1. その箇所「特有の内容」に即したものにすること（他の聖書箇所にも当てはまるような表現は避ける）
2. 「最初（当時）の読者」に向けられた内容であること（現代の私たちではなく、当時の聞き手や読者を意識する）
3. 短く、明確な一文で核となる「論点」を表現すること（詰め込みすぎず、中心的な「主張」に集中する）

目標は、その箇所の内容をその一文に「詰め込む」ことや、’単なる要約をすることではなく‘、むしろできるだけ明確に著者の「主な論点」と「主要な目的」を捉えることです。注意すべき点としては、聖書箇所の「主な論点」は単なる説明文ではない場合が多く、「命令形（imperative | 〜しなさい）」として表現されることもあります。これは著者の主要な意図が読者への「行動の呼びかけ」である場合が多いためです。いずれにしても、この問いでは、あなたがその箇所の「主な論点」を理解し、それを自分の言葉で簡潔に表現できるかどうかが問われています。著者の目的や主張を明確に捉え一文で提示する、あなたなりのベストな表現を目指してください。

**４. この箇所はイエス・キリストの福音とどのようにつながっていますか？福音の「どの側面」が示されていますか？**

この2つの質問は、「聖書のすべての箇所は、何らかの形でイエス・キリストの福音と関係している」という理解に基づいています（ルカ24:13–49 参照）。最初の問いは、「あなたが取り扱っている聖書箇所、あるいはその一部が、福音と関わっているのか」を問うものです。たとえば、その箇所は**福音を指し示している**場合もあれば、**すでに語られた福音を振り返っている**内容であることもあります。ここで重要なのは、**その関係性が聖書本文に根ざしていて正当であること**です。恣意的な寓意づけや過度な霊的解釈（over-spiritualizing）には注意してください。この問いに答えるためには、以下のようなアプローチが参考になるかもしれません：

* **明示的な記述（Explicit Reference）：**これは最も分かりやすいケースで、時にはイエス・キリストの福音がそのまま明確に本文中に記されていることがあります。これは福音書でも時々見られますが、特に書簡に多く登場します。ただし、その記述を引用する際には、**著者がその福音をどのように扱っているかを尊重し、それに従って解釈してください。**
* **預言の成就（Prophetic Fulfillment）：**預言とその成就を通じて、聖書の他の箇所と明確につながりが示される場合もあります。たとえば、預言書に登場するメシアに関する預言は、当時の歴史的背景における部分的な成就と、イエスにおける最終的な成就の両方を含んでいます。福音書・使徒の働き・書簡などでは、これらの預言に言及しつつ、福音とのつながりを明らかにしています。こ**のような預言や成就との関係が見られる場合は、それが福音との接点かどうか探ってみてください。**
* **歴史的展開（Historical Trajectory）**：  
  これはやや高度なアプローチです。なぜなら、聖書全体の救済史（redemptive history）に対する十分な理解が求められるからです。私たちが取り扱うどの聖書箇所にも、創造から新しい創造に至る歴史全体の中で救済史的な価値を持っています。そして、その中心にあるのが、**イエス・キリストの死と復活**です。したがって、あなたが取り扱う箇所にも、そのイエスの十字架を指し示す何らかの**歴史的な予兆**、すなわちイエスの死と復活へと一歩ずつ（前に進むにせよ、後ろを振り返るにせよ）近づいていくような歴史のしるしが含まれているかもしれません。  
  救済史の時代（eras）や区分（epochs）という観点から考えながら、その箇所が「十字架と復活へと向かう歴史の流れ」において、どのような役割を果たしているのかを探ってみてください。
* **類型論（Typology / タイポロジー）：**類比（analogy / アナロジー）とは、二つの概念を比較する広い方法で、類似点と相違点の両方を含みます。「類型論（typology / タイポロジー）」は、聖書における特別な類比の一種です。そこでは、人、物、制度、その他の事柄が比較の対象となります。ここで重要なのは、その比較には進展性（progression）が含まれている点であり、最終的な人物・事柄・出来事が、前のものよりも価値や重要性が高められる（昇華される）ということです。つまり、「型（type）」とはある種のパターン、あるいは影であり、それが究極的な実現を指し示しています。そして、福音との関わりにおいて言えば、「型」は、福音のある一側面によって投下された影なのです。  
  ・モーセは重要な預言者でしたが、究極の預言者であるイエスを指し示しています。  
  ・ダビデは良き王でしたが、究極の王であるイエスを指し示しています。

ここで留意すべきは、類比や類型論には、常に「類似点」と「相違点」の両面が併存するという点です。

* 聖書神学的テーマ（Biblical Theological Themes）：

テーマとは、聖書全体を通して段階的に展開していく大きな概念を指します。これらは、「歴史的展開（historical trajectory）」のアプローチと重なりながらも、複数の「タイポロジー（型）的／類型論的（typological）」なつながりを包括的に統合したものとして理解することができます。主要なテーマの例としては、神の国、出エジプトと捕囚、祭司と神殿、契約などが挙げられます。その他にも多くのテーマがありますが、あなたが取り扱う聖書箇所に、こうした大きなテーマのいずれかがどのように現れているのかを考えてみてください。そして、そのテーマがイエス・キリストの福音とどのように関係しているかを探ってみてください。

* 福音に基づいた教え（Gospel-Based Teaching）：

ある聖書箇所は、倫理的な行動や実践に焦点を当てています。そのような箇所では、**恵みによる福音の視点が見えにくく**、ただ「従いなさい」という命令だけが強調される傾向があります。ここで大切なのは、**福音と行いの関係の順序を正しく理解すること**です。私たちは、**救われたときにキリストの義を与えられます**（義認 | justification）。この義は、自分の行いによるのではなく、**信仰によって与えられる義**です（ピリピ3:8–9、2コリント5:21参照）。**正しい行いによって救われるのではありません**。しかし、**すでに救われた者として、神の御心に従って生きる歩み（聖化 | sanctification）が求められているので**す。ですから、神がご自身の民に求める倫理的な命令に出会ったときは、それを**福音の前提の中で理解する**必要があります。そのために、福音が土台となっている神学的な考えがあるかを探ってみましょう。言い換えれば、倫理的な「問い」や「問題提起」であり、福音がその答えや解決を与える、と見ることができます。

一般的に、取り扱う聖書箇所と福音との関連性を示す場合、特に旧約聖書において、福音とのつながりの正当性を示す場合には、説教で取り扱う聖書箇所を補完するような聖書箇所を提示することが最良の方法です。つまり、聖書そのものが語る福音とのつながりを教えるのであって、漠然とした神学的な概念を抽象的に関連付けるだけにならないように注意してください。

さらに、福音とのつながりを示すだけでなく、その中で「福音のどの側面が焦点となっているのか」についても考える必要があります。すなわち、取り上げている箇所が福音のどの側面と結びついているのか、あるいは福音に対してどの角度から光を当てているのか、ということです。ご存知のように、「福音」は非常にシンプルでありながら、同時に奥深く、多面的なものです。福音の中心は言うまでもなく、イエスの死と復活です。これは、人間の罪のための代替的（身代わりの）贖い（substitutionary atonement）であり、神との関係における永遠のいのちが与えられることです。しかし、聖書箇所によっては、福音の他の側面がより関連性を持っている場合もあります。たとえば、受肉（Incarnation）、昇天（Ascension）、再臨（Second Coming）、あるいはイエスの生涯・奇跡・教えといった側面です。また、悔い改め、信仰、従順といった福音の含意（implications）、さらには罪の赦し、永遠のいのち　といった福音の結果（results）としてもたらされるものもあります。これらのいずれかが、あなたの取り扱う聖書箇所と福音の概念を結びつける、最も強固で、御言葉に根差した正当なつながりとなるかもしれません。

**５．あなたがあなたの聞き手に伝えようとしている主な論点は何ですか（一文で簡潔に答えてください）**

説教における「主な論点」とは、今日の語り手であるあなた自身が「現代の聞き手」に向けて最も伝えたい核となる主張を指します[[1]](#footnote-1)。講解説教や教えにおいては、それは当然、著者が当時の（最初の）聞き手に語った「主な論点」と深く結びついており、さらに福音とのつながりを考慮したものとなります。つまり、それは現代の聞き手を説得しようとしている最も基本的な考えと言えます。論理的に構成され、証明の積み上げ（前提に基づき議論を展開すること）の結果として、明確に表現されると良いでしょう。

**6. この箇所から、どのような適用が導き出せるでしょうか？クリスチャンとノンクリスチャンの両方を考慮してください。**

説教からの「適用（application）」（または含意点（implication））は、多くの場合、語り手であるみなさんが設定した主な論点と密接に関係しています。適用は一つの場合もあれば、複数あることもあります。説教全体を通して明確に語ることも、最後にまとめて述べることもできるでしょう。これまでワークシートで取り組んできた内容を土台にし、聖書本文から主要な（必要であれば副次的な）適用を導き出し、それをどのように論じるかを整理してください。さらに、適用については、聞き手の二つの具体的な層（クリスチャンとノンクリスチャンの両方）を視野に入れて語られるべきです。これは、あなたの聖書箇所が福音とどのように関連しているかを踏まえて適用を導き出し、単に「最初（当時）の聞き手にとっての意味」に留まらないようにすることが重要です。

**7. あなたの説教のタイトルとアウトライン（概要）[[2]](#footnote-2)を書いてください。**

**説教タイトル（Sermon Title）：  
説教タイトルと**は、説教の中心的なアイデアを短く、簡潔に表現するフレーズです。聞き手の心を集中させ、「この説教を通して何を受け取るべきか」を明確にする役割があります。そのため、タイトルは説教の「主な論点」の文よりも短く、より的を絞った簡潔な表現である必要があります。同時に、**印象的で心を引きつける表現**にすることも大切です。「聞き手」の注意を引き付け、説教への関心を高めるような表現が望ましいです。そのため、タイトルは現代的で親しみやすい言葉を用いるのが適切でしょう。結局のところ、タイトルは説教で聞き手を説得するための最初の修辞的手段であると言えます。

説教アウトライン（Preaching Outline）：  
説教アウトラインとは、ホーミレティカル・アウトライン（homiletical outline）とも呼ばれ、**説教やメッセージを分かりやすく整理し構成するための枠組み**です。これは、聖書箇所に取り組む中で導き出される構造に基づくべきもので、多くの場合その聖書箇所の構造に関連しています。同様に、「説教の主な論点」が「著者の主な論点」に対応するように、あなたが説教を組み立てる際の流れ（アウトライン）も、著者が自分の議論をどのように論じたか（その構成）に対応している必要があります。ただし、あなたの説教の主な論点と同じく、「**聞き手（現代の聴衆）」と「福音とのつながり」**も考慮して整理する必要があります。  
  
「構造」の分析は舞台裏での作業であるのに対し、説教**アウトライン（homiletical outline） は、教会の聴衆に向けて聖書箇所を説き、聞き手が説教を理解しやすくするための道しるべ**として構成し準備されるものです。説教用のアウトラインには詳細なノートを含めることもありますが、ワークショップで提出する説教アウトラインは、各セクションにつける見出し程度で十分です。

「本当に説教**アウトライン（homiletical outline）**を書かなければならないの？」と疑問に思うかもしれません。答えは、**はい**、必ず書いていただきます。牧会や宣教に携わる人々は、さまざまな教えの働きを担います。ある人は説教や教える場に立ち、説教的アウトラインが役立つ状況に置かれます。またある人は、地域教会での働きを導いたり、カリキュラムを作成したり、リーダーの育成をするなどの働きをします。**どのような形であれ、「御言葉を取り扱う働き（Word work）」をするのであれば、説教学的に（homiletically）考えることは非常に重要なのです！**

**その他よくある質問（FAQ）**

**Q1.「著者の主な論点」と「私自身の主な論点（および適用）」の違いは何ですか。**  
「著者の主な論点」（質問3）は、**当時の聴衆に向けたメッセージ**です。それに対して、「あなたの主な論点」や「あなたの適用」（質問5）は、**現代の聞き手に向けて語るメッセージ**と捉えると分かりやすいでしょう。別の言い方をすれば、「著者の主な論点」は「その時・その人たち」に向けた適用に対し、「あなたの主な論点」は「現代・私たち」に向けた適用です。

**Q2. ハンドアウトはどのような形式が望ましく、なぜ複数部印刷する必要があるのですか。**  
ハンドアウトには、準備ワークシートの回答内容を記載してください。**A4サイズ1枚（表裏）に収まるように簡潔にまとめ、できればパソコンを用いてタイプされたもの**が理想です。説教者・教師として「明確かつ簡潔に伝える力」ことはとても重要です。**スモールグループでの議論がより実りあるものになるよう、複数部（グループ全員分）ご持参ください。**

**Q3. スモールグループでのプレゼンテーションはどのような内容ですか。**  
5分間の発表では、準備用ワークシートの内容（説教アウトラインを含む）をそのまま発表してください。発表後にその発表に基づいてディスカッションを行い、発表者がさらに成長できるよう、取り組むべき改善点をひとつかふたつ提示することを目的としていきます。必ずしも、イラスト（例話）の選び方や、話し方（声のトーンスピード）などを細かく評価することはできませんが、むしろ、聖書箇所**を正しく理解し、適切に伝えるためのスキルを磨くこと**に焦点を当てます。

**Q4. 初めての参加なのですが、トレーニングを受けていないのに、準備ができるか不安です。**  
初参加の皆さま、ワークショップにご参加くださり感謝いたします！ワークショップのための準備については、この資料と、公式ウェブサイトに掲載されている教材を参考にしてください。もちろん、実際に宿題をする‘前’に説明を受けられれば理想的なのですが、それでは3日間のワークショップに「準備なし（宿題をしないまま）」で臨むことになってしまいます。私たちは、実際に自分自身で準備し、それを持ち寄り、レビューしてもらうことによってこそ成長できると考えています。初参加の方も、リピーターの方も、誰もが「毎回新しい学びがある」と口を揃えていらっしゃいます。

**Q5. 完成済みのサンプルワークシートを提供していただけないのはなぜですか？**  
サンプルの回答を提供すると、2つのことが起こることが分かりました。  
1つ目は、参加者の回答範囲が**狭まってしまう**ためです。つまり、参加者は意図せずして、サンプルワークシートに記載されている回答（の種類）の範囲・枠内に自分自身を限定してしまうのです。私たちは、この作業に必要な判断力を、事前に制限するのではなく、スモールグループでのディスカッションを通して身につけていただきたいと考えています。

2つ目は、参加者がサンプルワークシートの回答を「正解」と誤解してしまうことです。私たち自身、常に進歩の途上であり、毎回より良いワークシートを作りたいと願っています。（完成された模範解答など存在しない、という前提であり）決して「ある箇所を完全にマスターした」などとは考えていません。私たちもまだ成長過程にあり、一緒に学び続けているのです。

**Q6. 間違えたらどうしよう…？**  
これはFAQの最後の質問ですが、**実際には多くの人が最初に心配する点です**。緊張してしまっても大丈夫です。私たちは誰もが、神の御言葉を正しく扱えるか不安を覚えるのは自然なことです。クリスチャンとして、私たちは学びのプロセスは継続的なものであることを理解しています。私たちは常に新しい方法で成長することができます。このワークショップにおける双方向の学びの時間やスモールグループでのディスカッションの目的のひとつは、講師（インストラクター）やスモールグループリーダー自身もまた、新しいことを学んでいくことにあります。グループリーダーたちは互いに励まし合い、挑戦し合いながら成長できるような協力的な環境を作っていきます。多くの人にとって、自分の成果を「ピアレビュー（仲間からレビュー・フィードバックを受けること）」されるのに慣れていないかもしれませんが、それが説教者・教師として私たちを成長させる上で非常に貴重であることが分かるかと思います。

ですから、どうぞ安心してこのワークショップを楽しんでください！

1. 本書では「説教（sermon）」という語を使用していますが、文脈によっては、女性が女性に教える場面において「説教」という言葉に女性自身が違和感を覚える方もいらっしゃるかもしれません。当資料では、一般的な牧師の文脈を想定して書かれており、用語の選択が性別に関する立場を主張するものではありません。なお、私たちの信仰声明においては、性別と奉仕に関する立場が明確に示されています。  
   2 女性向けのワークシートには、「あなたのメッセージのタイトルと指導の概要は何ですか？」という質問があります。 [↑](#footnote-ref-1)
2. [↑](#footnote-ref-2)